

考える

よく生きるためにはよく考えなければならぬ

いったい何が問題なのか。その問題には答えがあるのか。
その答えはただ一つなのか、それともいろいろあるのか。
あるいは、その問題はそもそも答えのない問題なのか。
これらをはっきりさせるには、一度立ち止まって、
はじめからじっくり考えてみなければならない。

「哲学」

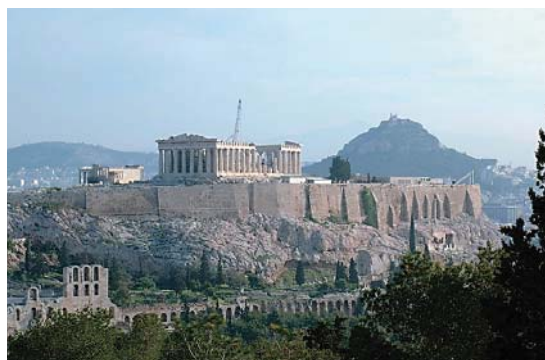
テツガクというこの言葉を聞くと、たいがいの人は少し緊張し、なぜか身構えてしまう。確かに、発音そのものが堅苦しいし、その内容も漠然としていて捉えがたい。何を、どういう風に研究する学問なのか、その日本語の名前からだけでは全く見当もつかないからだ。

ところが、しかし、テツガクをそうした印象だけで敬遠してしまうとすれば、それはとても“もったいない”ことだ。というのも、テツガクとは、その堅苦しい名前とは違って、その元々の意味は philosophy、すなわち「**知ることを愛し求める**」ことであり、実際、どのような哲学者も、根本的なことや大事なことを、それがどうということかを知ろうとして、一所懸命その生涯をかけて考え続けた人たちだからである。

人生のことも、社会のことも、世界のことも、そして自然や宇宙のことも、たくさんの知識を勉強すれば、それなりに分かってくる。しかし、知れば知るほど、それでも分からないことが謎となって現れてくる。心はどこにあるか。言葉はどうして意味を持つのか。絵や音楽が美しいというのはどういうことか。時間が過ぎ去るのは、何が、どこへ過ぎ去るのか。人間はなぜ愛し合ったり憎み合ったりするのか。…このような簡単なこともよく理解しようとする、すぐにははっきりした答えが見つからない。分かっているつもりでいても本当はよく分かっていない謎もあれば、そもそもその不思議さが気付かれていない、まだ誰にも発見されていない謎もある。

テツガクは、このような謎を見過ごさず、それを解き明かそうと、どこまでも誠実に取り組もうとする、知的な冒険なのだ。この点から見れば、プラトンもデカルトもカントも、過去の哲学者たちはみんな偉大な冒険家であり、**謎解きの独創的なパイオニア**であることが分かる。ただなんとなく生きるのではなく、自分の生きている世界について、それが一体どうなっているのかを知りたいと思い、考え出した時、その時にはもうすでにテツガクは始まっている。

(菊地 恵善、哲学・哲学史)



◀アテネのアクロポリス。その丘にパルテノン神殿が燦然と威容を誇っていた紀元前5世紀、哲学者ソクラテスはアテネ市民に向かって次のように問いかけた。「いいかね、君、君はアテーナイ人だ。知と力にかけては最も鳴り響いた、最も偉大な都市国家の市民だ。だが、それでいて、金銭、名声、榮譽についてはできるだけ多くをものにしようとして心を配りながら、他方、知恵（プロネーシス）や真理（アレーテア）や魂（プシューケー）について、できる限り善き、優れたものにしようという配慮もなく、思慮もないとは、それで君、恥ずかしいとは思わないか。」